

当社の決済リスク管理状況

2018年3月12日

① 当社ビジネスモデルの特徴

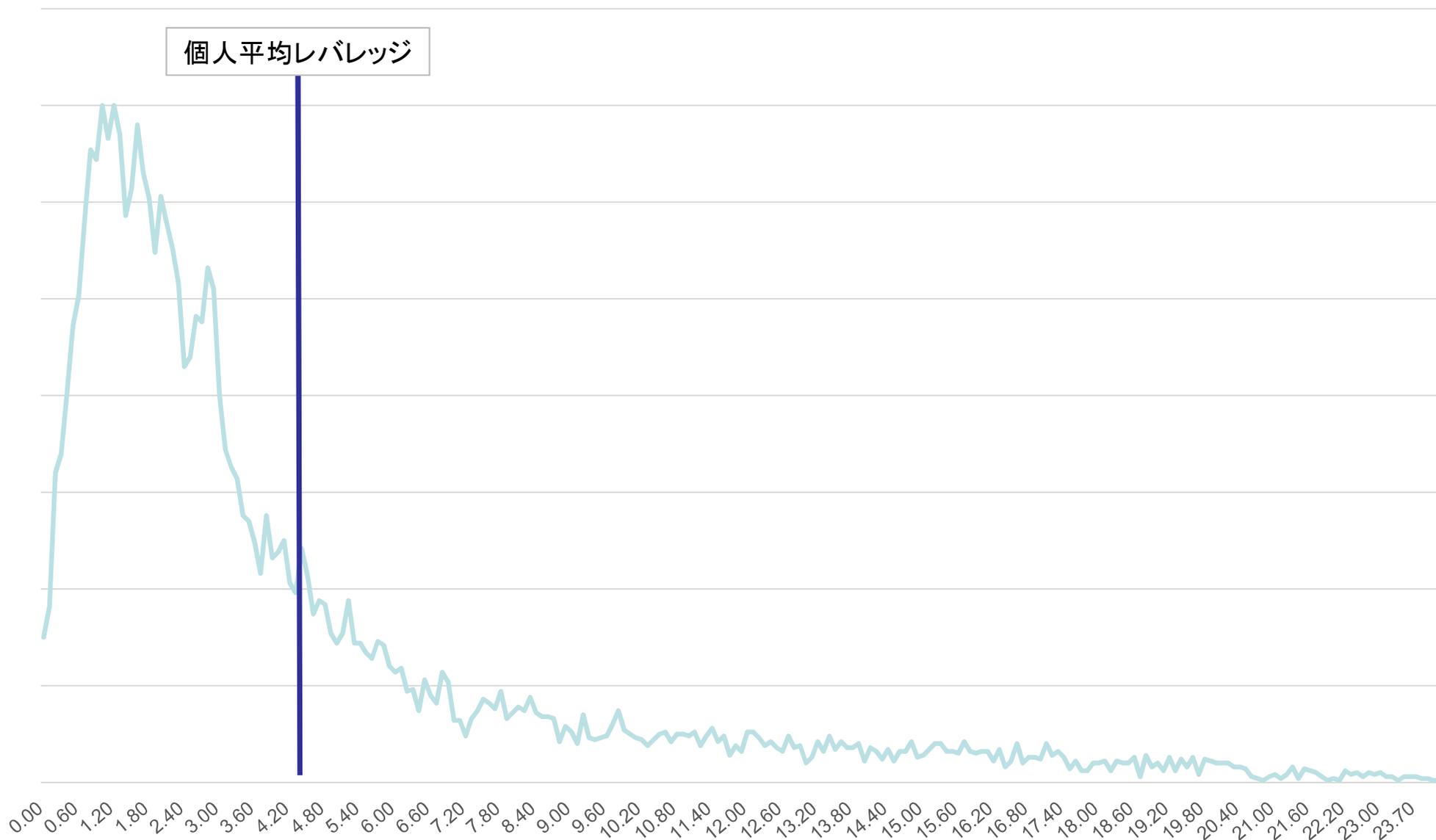
- 伝統あるマネーブローカーの子会社（セントラル短資グループが株式の約9割を保有）として、健全でコスト等の面で魅力的な中長期外貨投資手段を提供。
- 外貨資産のヘッジ、企業・個人の輸出入関連外貨調達等を機動的に行う実需取引手段も提供。

② 顧客特性

- 建玉の保有期間が長め（顧客の半数は1年半以上保有）。
- 過去1年の平均レバレッジは、個人4.3倍 法人6.3倍。
- 1月末の個人平均レバレッジは4.6倍、7割はそれ以下で取引。

2. 当社顧客のレバレッジ分布状況

【2018年1月31日ニューヨーククローズ時点の個人顧客データ】



①ソフトリミット = 規定類での制限設定

- 業務継続に影響のないポジション量、損失量として設定。
- 変更は、取締役会の決議/稟議決裁が必要。

②ハードリミット = システム上の閾値設定

- ソフトリミットより保守的な値を設定。
- 通貨ペアによっては、VaR値を用いて閾値を機動的に変更。

③監視体制 = リミット遵守のモニタリング

- 未カバーポジション発生・リミット遵守状況を監視。
- リスク管理室が監視結果を定期的に経営陣に報告。

① ロスカットルール(次ページで詳述)

- 口座清算価値(未実現損益を勘案)が必要証拠金を下回った段階で即時ロスカットすることで、未収金発生を防ぐ。
- 当社は追証制度は採用せず。

②顧客口座毎の建玉制限

- 当社の場合、商品毎に証拠金1.2億円相当額まで。

③顧客未収金発生の都度経営陣に報告し、適切に対処

① 証拠金維持率の監視

- 水準の変化に応じて監視間隔を短縮し、未収金の発生リスクを抑制。

② リスク管理室による運用状況の監視

- 監視状況とその適切性をモニター。

③ 適切な証拠金維持率の設定

- 各通貨ペアの週末価格ギャップのデータを中心に、必要証拠金率・証拠金維持率を決定。

ロスカット監視間隔	
証拠金維持率	監視間隔
1,001%~	300秒
1,000%~501%	180秒
500%~201%	120秒
200%~131%	10秒
~130%	1秒

証拠金維持率とは、維持証拠金に対する口座清算価値（現金残高+未実現損益）の割合。これが100%に達した段階で強制ロスカットが発動される。

- ①当社がポジションを保有する先は、G-SIFIsの3PBに限定
 - PBとの間で、定型的なISDA/CSA契約を締結。
 - 他のカバー先との間で発生したポジションを、3行に随時移管。
 - 担保としてLG(銀行発行の保証)を活用。

- ②CPの動向をCDS、株価等により日々モニター
 - CDS急騰や株価急落時等には、速やかに経営陣に報告。
 - その指示に基づき、建玉を他PBに移管、決済用資金も圧縮。

①未収金リスクへの対応

- 過去発生したケースでは、多くは当日中に回収した。
- 1週間以内の回収率は、件数で75%、額で84%。

②未カバーリスクへの対応

- 過去に、業務継続性を危うくする損失発生は起きていない。

③CPリスクへの対応

- リーマン・ショック時には、同社との取引は既に停止していた。

④短期的な資金不足(懸念)発生時の対応

- 借入枠、OD等を活用。

8. 対顧客価格形成方法

- カバー取引先は22社。
- この中から価格を安定的に提示する5社を選び、これらの提示する価格を基に顧客向け価格を生成して顧客に配信。

